

氏名	中 島 和 雄
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 811 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和 51 年 12 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学 位 論 文 題 目	乳癌のホルモン環境に関する研究 第 1 編 ホルモン環境と予後の関連性 第 2 編 乳癌患者血中 Estradiol に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 砂 田 輝 武 教授 関 場 香 教授 大 藤 眞

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

第 1 編 ホルモン環境と予後の関連性

乳癌患者のリンパ節転移、予後に関して、ホルモン環境の面から検討を加えた。尿中 17-ketosteroids, 17-hydroxycorticosteroids と steroid binding protein を一定量含んでいる血清 α -, β -globulin を環境因子とした。17-KS ≥ 3 mg, 17-OHCS ≥ 2 mg/day, α -gl. < 13 %, β -gl. < 11 % は良いホルモン環境で、進行、再発乳癌に対する外科的ホルモン療法によく反応したが、17-KS < 3 mg, 17-OHCS < 2 mg/day, α -gl. ≥ 13 %, β -gl. ≥ 11 % は悪いホルモン環境で、予後が悪く治療にも反応が少なかった。

第 2 編 乳癌患者血中 Estradiol に関する研究

乳癌、乳腺症、両側卵巣剔除例、両側副腎剔除例、正常婦人の血中 estradiol を radioimmunoassay により測定した。閉経前乳腺症では正常人に比し、正常ないし、やや高値で、閉経後乳腺症では閉経前乳腺症より低値であった。閉経前乳癌患者では正常人に比し、高値のものが多し。閉経後では一定の値を示さない。卵巣剔除例は正常人に比し低値であった。乳癌の内分泌療法に際して、血中ホルモン濃度を考慮して治療を行うことは意義がある。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は乳癌のホルモン環境について研究したものであるが、なお問題点を残している乳癌患者の内分泌療法においてホルモン環境調査の予後、適応決定上の意義について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。